

On the Aquisition of the Adverb "YAPPARI" and the Particle "NE"

Yasuko Sasaki and Ryo Kawaguchi
Japanese Language and Culture
Graduate School of Humanities
Ochanomizu University

Summary

In this paper we have analyzed the role of the adverb "*yappari*" and the particle "*ne*" both of which are frequently used in conversational Japanese. We hypothesized that "*yappari*" and "*ne*" have the function of "in-group identity markers" and raise the politeness of the sentence. A survey wa circulated and answered by 123 Japanese students and 75 learners of Japanese.

The procedure of this study was follows:

- 1) establish 5 categories of personal relationships and corresponding levels of politeness used.
- 2) measure the degree of politeness used in "expression of request."
- 3) establish the correlation between a particular expression of request and a corresponding level of politeness.
- 4) carry out the same analysis for expressions with "*yappari*" and "*ne*".
- 5) compare the results of the analysis of "expressions of requests" with the analysis of "expressions with '*yappari*' and '*ne*'."

Hypothesis testing and Spearman's rank correlation analysis verified our proposition. The comparison of expressions suggests that the acquisition of the politeness function of "*yappari*" and "*ne*" is particularly difficult for the learner of Japanese.

副詞「やっぱり」と終助詞「ね」の習得に関する研究
－待遇表現上の機能を中心として－

佐々木泰子、川口 良

お茶の水女子大学大学院人文科学研究科
日本語文化専攻M2年

1. 目的

日本人の日常会話の中で頻繁に用いられる、副詞「やっぱり」の機能について分析を行ってみると、談話の中で用いられる「やっぱり」は、その文末に終助詞「ね」を伴うことが多いことに気づく。

例えば、『報道マルチチャンネル』(9月27日12:00~12:45PM10ch, 録)の談話資料中45分間においては、対応する文末をもつ「やっぱり」(「やはり」「やっぱ」を含む)22例中、「ね」を文末にもつものは15例、68.2%を占め、また『ブロードキャスター』(5月23日10:00PM~6ch, 録)においては、「やっぱり」16例中12例が「ね」と共起して75%をも占めている(資料1参照)。7割に及ぶ「やっぱり」が「ね」と共起するという事実から、これらがもっている機能は、ある面において一致するものがあるのではないかと推測される。本研究は、次の二つを仮説として立てて、その検証を試みることを目的とするものである。

1. 副詞「やっぱり」と終助詞「ね」は共通する機能を持ち、それは待遇表現上の機能である。
2. この両者がもつ待遇表現上の機能は、日本語学習者にとっては習得しにくい。

以下では、まず、副詞「やっぱり」と終助詞「ね」のそれぞれについてその機能を分析し、その一致するところを解明する。次に、その一致した機能をアンケート調査によって証明し、日本語学習者にとってその習得がどのようになされているか、その一側面を把握することにする。

2. 「やっぱり」の機能について

2-1. 前提条件による「やっぱり」の機能分類

もちろん、副詞「やっぱり」のすべてが「ね」と共起するわけではなく、「やっぱり」はさまざまな文種の中で用いられ、多種多様な文末と共起するものである。そこで「ね」と関わる「やっぱり」の機能を捉えるために、この副詞がもつ機能について考えることにする。

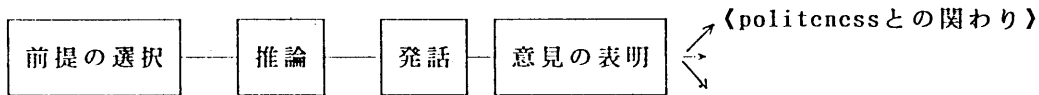
副詞「やっぱり」は語用論的前提に基づく話し手の推論を表し、その前提を指示する指示語としての機能をもつと考えられる。「やっぱり」が指示する前提には、次の三つが想定される。

- (1). 客観的事実…(例) 去年も暖冬だったが、今年もやっぱり暖冬だ。

- (2). 世間一般の常識・社会通念… (例) 利口そうでもやっぱり子供だ。
 (3). 自己の主観… (例) やっぱり僕の考えが正しかった。

2-2. 発話に至る過程

次に、以上のような三つの前提に基づく話し手の、推論から発話に至るまでの認知思考過程を図式化してみる。



まず(1)～(3)の前提の選択を行う。

次にその前提に基づいて推論するのであるが、その前提の区別は話し手自身にとっても明確なものではなく、(1)と(3)の前提もあたかも(2)の前提であるかのように聞き手にも思わせることができる。つまり、話し手自身も(1)客観的事実(3)自己の主観である前提も、(2)世間一般の常識・社会通念としてとらえていたり、あるいは聞き手にもそのように思わせることができる。そのような機能を「やっぱり」はもつと考えられる。これは、西原(1988)のいうところの「この副詞は、慣用的含意としては、『話者が必然、あるいは妥当であると考ええる日常的推論体系の伝達』を持ち、」に通ずるものと考ええる。この推論体系を、田窪(1989)の談話管理理論を応用して考察してみる。

まず談話の初期状態では、聞き手のスペースは話し手が想定する共有の知識と立場・視点の違いだけを写像関数Fにより写像したものである。写像関数Fは、対話相手との用語の対応をとる関数で、自分の用語を変域とし相手の用語を値域とする。「やっぱり」を用いる場合、話し手は、融合的な視点(←→対立的な視点)を指定する。ここでは、話し手が想定している「聞き手の知識」と話し手が想定している「聞き手が持っている話し手の知識」が一致している。この共有知識が前提となって発話に至るわけであるが、「やっぱり」を発話する場合はその共有知識である前提を指示し相手をその前提に注目させて、その後に再び前提をくり返す。従ってこの場合、発話は初期状態を変化させないことになる。

「日本語では、話し手・聞き手の共有知識のマークは、談話の初期状態、つまり、話を始める前から互いに知っていると思わせる知識か、話の最中、現実に経験した知識のみに付けられる」(田窪1989)とすれば、副詞「やっぱり」は、「共有知識のマーク」ということができるのではないだろうか。

3. 終助詞「ね」の機能について

辞書には、一般に終助詞の「ね」について「文の末尾に用いられて、①詠嘆(感動)を表す。②念を押す気持ちを表す。③相手の同意を求める気持ちを表す。」などの記述が見られる。また終助詞「ね」に関する先行研究は、大別して「ね」を①構文的観点および話し手と聞き手の関係から捉えたもの、②話し手と聞き手と情報の三者の親疎関係から捉えたものに二分されよう。

先行研究の第一グループに属すると考えられるものには、時枝(1951)、渡辺

(1953)、芳賀(1953)、佐治(1956)、上野(1972)、鈴木(1976)、などの研究がある。

これらの研究に共通しているのは、陳述に関する意見の相違(時枝は終助詞に陳述の働きを認めないが、渡辺は認める等)や、分類の方法に差(渡辺は終助詞を構文的機能によって分類しているが、佐治は接続の仕方によって分類している等)が認められのものの、「ね」は概して、聞き手に対する親和的な働きかけ、配慮をする助詞だという理解である。

また、近年のモダリティ研究の立場から、益岡(1991)は、終助詞「ね」は、文を伝達する際の、話し手の聞き手に対する態度を表す「伝達態度のモダリティ」を表すとしている。また、「伝達態度のモダリティ」の特性は聞き手に対する話し手の配慮という点にあるとしている点が注目される。

次に近年の終助詞「ね」の研究の主流を占める、話し手と聞き手と情報の三者の親疎関係から捉えたものについて、考察を加えてみる。

『情報のなわ張り理論』(1990)において神尾昭雄は、情報が聞き手のなわ張りにあるときは「ね」は必須であるとしている。

森山(1989)は、終助詞「ね」は、聞き手の情報と話し手の情報が最終的に一致するという見込みがあるという情報伝達的な意味を持っている。そして、話し手自身ある程度知っているという情報であり、かつ聞き手も知っている情報について、最終的に話し手と聞き手が共同理解に至るという情報伝達過程である、としている。

益岡(1991)は、話し手と聞き手の知識が基本的に一致すると判断される場合に「ね」が用いられ、「一致型の判断」とでも言うべきものを示すと述べている。

以上の先行研究が示唆するところをまとめると、「ね」は、話し手と聞き手の情報の共有を前提(仮定)とし、話し手の聞き手に対する親和・共存的な働きかけ、配慮を示す助詞であるということになる。つまり、先の「やっぱり」と同様に、「共有知識のマーク」とみなすことができると思われる。

4. 丁寧さとの関わり

次に、副詞「やっぱり」と終助詞「ね」丁寧さとの関わりについて考察する。

Brown and Levinson(1986)[以下B & L]に従えば、positive politeness (積極的丁寧表現)とnegative politeness (消極的丁寧表現)が敬語行動の中心的モデルであるとする。丁寧さの上位概念にpolitenessがある。

positive politeness は、相手のface(面子)を喜ばせることを言って相手を積極的に認めたり、仲間とみなして話し手が聞き手に対して親密な行動をとることである。それに対して、negative politeness は、相手のfaceを侵さないような言い方をして聞き手にかかる負担を少なくしたり、聞き手が行動の自由を束縛されたと感じることを減らすことである。

私達は一般に「敬語」という言葉から、改まった場所で目上の人に対して用いる「聞き手を常にある間隔に置こうとする敬語表現」(時枝・1951)を連想する。それは、B & Lに従えば、negative politeness のストラテジーのgive deference (敬意の表明)に含まれるものである。

一方、ここで扱う副詞「やっぱり」と終助詞「ね」は、positive politeness に含まれるものと考えられる。positive politeness のストラテジーには、大別して

1. claim common ground (共通基盤の要請)
2. convey that S and H are cooperators (話し手と聞き手が協力関係にある)
3. fulfil H's want for some X (聞き手のなんらかの欲求に応える)

の三つがあるとされている。

前に述べたように副詞「やっぱり」と終助詞「ね」は、話し手から聞き手への親和・共存的働きかけの表現であり、話し手と聞き手の情報の共有が前提とされ、共有知識のマークとしての機能を持つ。このような働きは、claim common groundとしてまとめられる八つのストラテジーの一つであるuse in-group identity markers (同一集団標識の使用)に対応するものと考えられる。use in-group identity markersとは「両者が同じグループに所属していることを喚起して、聞き手の友情、連帯を示すような表現の使用」である。一方、claim common groundとは、聞き手に関心を払っていること、聞き手と同じ仲間にいること、同じ考え、意見、態度、知識を持っていることを表明することを指す。

あいさつの言葉として日常的に使われる「今日はいい天気ですね。」という表現に含まれる「ね」や、意見を求められたときに、「やっぱり秋がいいですね。」のように使われる「やっぱり」や「ね」は、この文の内容には何ら影響を与えない、命題の外側にあるモダリティ表現である。ここでは、「やっぱり」や「ね」は「これは私だけの考えではありません」とか、「皆さんの考えと同じだと思いますけれど」という話し手のモダリティの表明であり、B & Lの言うところの「同一集団標識」として機能しているのである。

5. 調査概要

5-1. 目的

以上の論から、本調査においては「副詞「やっぱり」と終助詞「ね」には待遇表現上の機能がある」という仮説の検証を試みると同時に、その機能は日本語学習者にどのように習得されているか、その習得状況の一側面を把握することを目的とする。方法として、日本人と日本語学習者に対してアンケート調査を実施することにし、その内容については、井出祥子氏とその他の共同研究『日本人とアメリカ人の敬語行動』(1986)の中で使われたアンケート調査の方式を援用した。

5-2. 調査実施期間は92年5月

5-3. 調査対象

日本語を母語とするものとしては、日本人大学生123名(そのうち男性72名、女性51名)日本語学習者としては、大学の留学生および日本語学校の学生75名(そのうち韓国語話者38名、中国語話者28名、その他9名)を対象とした。日本語学習者については、いずれも日本語学習歴1年以上の学生を対象にして行った。

5-4. 調査内容および結果

アンケートの内容については、次のような手順で調査した。

(1) 人物カテゴリーについてP・D（心的距離）を測定する

まず資料[1]-①にあるように、日本人と学習者が日常接する機会のあると思われる人を、AからHまで、人物カテゴリーとして設けた。ここでは、日本人は「ウチ」と「ソト」の概念から人間関係をとらえるという立場に立って人物設定を行った。そして、「最も気楽な人物」を1、「最も改まった人物」を5とする、5段階のものさしを示して、それぞれの人物の丁寧度に応じて1から5までの段階に○をつけてもらった。このような方法で、相手の人物に対する丁寧度を5段階で測定した。

資料[2]はそれぞれの人物に対して日本人と学習者のもっている丁寧度を比較し、スケールで示したものである。5段階評価で、日本人の学長に対する丁寧度の平均は、4.762、自分の指導教授に対する丁寧度の平均は4.424 であるのに対して、学習者は学長に対して、4.411、自分の指導教授に対して3.824 となっている。

(2) 「やっぱり」と「ね」を含む表現の丁寧度の測定

副詞「やっぱり」と終助詞「ね」を含む表現と含まない表現aからr（資料[1]-②）を提示し、それぞれ5段階のものさしの上に○をつけてもらうことによって、各表現の丁寧度を測定した。今回の調査目的にかなう「やっぱり」と「ね」の使用を引き出す質問として、日本人に対しては、「ヨーロッパへ行くとしたら季節はいつがいいですか。」、学習者に対しては「あなたの国へ行くとしたらいつがいいですか」と尋ね、その答えとして「やっぱり」を含むものと含まない表現aからrを用意した。

資料[3]は各言語表現の丁寧度を比較したものである。

日本人の場合、丁寧度が大きく文末のデス体とダ体で分けられると意識していることがわかる。それに対して学習者の方はデス体とダ体の明確な区別をしていない。個々の表現についてみると、cの「やっぱり秋がいいでしょうね」の方がlの「秋がいいでしょうね」より、丁寧度は上にきており、また、lの「秋がいいでしょうね」の方がmの「秋がいいでしょう」よりも丁寧度は上にきている。ダ体のグループを見ると、gの「やっぱり秋がいいだろうね」の方がqの「秋がいいだろうね」より丁寧度は上にあり、また、qの「秋がいいだろうね」のほうがrの「秋がいいだろう」よりも丁寧度は上にある。同様にして他の表現も見ると、日本人も学習者もともに、「やっぱり」と「ね」のついた表現の方がつかない表現より、すべて丁寧度が高くなっていることがわかる。つまり副詞「やっぱり」と終助詞「ね」には丁寧度を高める働きがあることが数量的に確認されたのである。

ここで前述の論にもどって考えてみると、副詞「やっぱり」と終助詞「ね」はともに同一集団標識となって politeness の機能をもち、相手に対する親愛・共存の気持ちを表して、Brown and Levinsonの言うところのpositive politeness の範疇に属すると考えたのであった。井出(1992)によると、「日本人の概念イメージとして、親しいと感じる領域と丁寧に感じる領域が相反する関係にある」と言われているのであるが、本調査結果に関する限りでは、副詞「やっぱり」と終助詞「ね」は、ともに「親しいと感じる領域と丁寧に感じる領域」が重なり合った

領域にあると言える。

国立国語研究所(1990)では現代敬語の使用意識を「あらたまり>へだて>品位>美化>親愛」、また非敬語表現として「近づき>くだけ>ぞんざい>見下し>軽蔑」と段階付けをしている。副詞「やっぱり」と終助詞「ね」は、敬語表現のハイラーキーでは最下位の「親愛」に属するものであるが、非敬語表現のハイラーキーから見れば最上位に位置すると考えられる。本アンケート調査において提示された言語表現は、「親愛」を丁寧度の最上位に置き、「近づき>くだけ>ぞんざい」へと丁寧度の下がっていく言語表現群であると言える。従って、negative politeness のストラテジーといえるデス体に、positive politeness のストラテジーといえる「やっぱり」と「ね」を付加したものが最も丁寧度が高くなっているのではなかろうか。そして非敬語表現であるダ体のグループにおいても、「やっぱり」と「ね」が丁寧度を高める要素となって話者の言語表現使用意識のハイラーキーを形成していると考えられる。

また、学習者の方は、このpositive politeness がもつ丁寧度については「ぼんやり」(井出1986)と感じているようではあるが、デス体とダ体が一体となった言語表現になると、混乱が見られた。このことから、positive politeness とnegative politeness が混然一体となった言語表現の丁寧度の習得は、容易ではないらしいといえる。

(3)「ペンを借りる」依頼表現の丁寧度の測定

それではnegative politeness だけに限った場合、その習得はどうなのであろうか。そのnegative politeness の習得状況を見るために、「ペンを借りる」という依頼表現をaからp(資料[1]-③)まで提示し、「やっぱり」と「ね」を含む表現と同じ手順で、丁寧度を測定した。

資料[4]は、ペンを借りる場面のそれぞれの表現に対して、日本人と学習者のもっている丁寧度を比較したものである。

日本人の丁寧度の平均は、一番高いhの「そのペンお借りしてもよろしいでしょうか」は4.872、一番低いoの「ペンある」という表現は1.187となっている。一方、学習者の丁寧度の平均は、一番高いhに対しては4.5、一番低いoに対しては1.48となっている。hからoまでの丁寧度の幅を比較すると、hとoの表現に対して、日本人は3.675の丁寧度の差をもっているのに対し、学習者は3.020で、日本人の方がかなり大きいことがわかる。

また標準偏差の平均を出してみると、日本人は0.653、学習者は0.979となっており、それぞれの表現に対してもっている丁寧度のばらつきは、学習者のほうがかなり大きいことがわかる。

次に同じ表現で日本人と学習者を結んでみると、日本人はpの「そのペン貸してくれませんか」kの「そのペン貸してください」とjの「そのペン貸してほしいんだけど」の表現に対してははっきりと丁寧度の差を感じているのに対し、学習者のほうはこの三つがあまり明確に区別されていないことがわかる。同様に、日本人がeの「そのペン借りていい」とdの「そのペン貸してくれる」のグループとlの「そのペン貸してよ」aの「そのペン貸して」bの「そのペン借りるよ」oの「ペンある」のグループに対してははっきりと丁寧度の差を意識しているのに

対し、学習者は d～o の表現の丁寧度をあまり明確には区別していない。

日本人と比較すると、依頼表現に現れた丁寧度、つまり negative politeness だけの場合でも、学習者はそれぞれの表現に対する丁寧度に対して「ぼんやり」とした意識しかもっていないことが理解される。

そこで、この「ペンを借りる」依頼表現の丁寧度と、「やっぱり」と「ね」を含む表現の丁寧度の習得状況を比較するために、それぞれの順位相関を算出した。この順位相関は、各言語表現の丁寧度の順位について日本人と学習者を比較し、双方が全く一致すれば 1 となり、全く異なれば 0 となるものである。従って 1 に近いほうが習得が進んでいると言えるわけだが、「ペンを借りる」依頼表現の順位相関は 0.9411765、「やっぱり」と「ね」を含む表現の順位相関は 0.8947368 となって、「ペンを借りる」依頼表現に現れた丁寧度のほうが習得しやすいことがわかる。つまり negative politeness のみの方が、positive politeness と negative politeness が一体となった場合よりも習得しやすいということが言える。

(4) 人物カテゴリーと表現の関係

資料[1]-④の人物カテゴリーそれぞれに対して、どの表現を使うか選んでもらい、それによって、言語表現と相手との相関関係を得た。資料[5]～[8]は、それぞれ丁寧度の順に人物カテゴリーと言語表現を並べかえ、それぞれの人物に対して使われる言語表現との関係を表したものである。

まず、日本人の場合を見てみると、[5],[7]ともにデス体とダ体で大きく二分されることがわかる。つまり「ペンを借りる」表現の場合、言語表現 k「そのペン貸してください」と j「そのペン貸してほしいんだけど」の間が境界となって、丁寧度の高い人物 A「学長」、B「教授」、H「アルバイト先の上司」には h～k までのデス体を用いた表現が使われ、丁寧度の低い人物 F「友達」E「父母」、D「兄姉」、C「弟妹」、G「親友」には j～o までのダ体の表現が使われている。

また、「やっぱり」と「ね」を含む表現の場合も同様に、言語表現 n「秋がいいです」と g「やっぱり秋がいろいろね」の間が境となって、丁寧度の高い人物 A, B, H には c～n のデス体を用いた表現が、丁寧度の低い人物 F, E, D, C, G には g～p のダ体の表現が使われているのである。デス体を使うかダ体を使うかによって人物カテゴリーを二分してみると、F「友達」を境として A「学長」、B「教授」、H「アルバイト先の上司」のグループと E「父母」、D「兄姉」、C「弟妹」、G「親友」のグループに分かれることがわかる。

つまり、A, B, H の人物をソトの人間、E, D, C, G の人物をウチの人間と考えるならば、日本人は相手をウチ・ソトの概念によって言語表現を使い分けしていることがわかる。一方、学習者の方の資料[6],[8]を見てみると、相手によって言語表現が二分化されるということではなく、日本人のようにウチ・ソトの概念で言語表現を使い分けるといふ敬語行動は意識されていないことがわかる。

6. 結論

1. 副詞「やっぱり」と終助詞「ね」は丁寧度を高める機能をもつ。つまり

politenessに関わる機能がある。

2. 親愛・共存を表す言語表現に対しても、日本人は丁寧さを感じている。つまり、親しさと丁寧さは重なり合う領域がある。
3. 日本人はウチ・ソトの人間関係によってデス体とダ体を使い分けている。つまり、ウチ・ソトの概念によってnegative politeness のストラテジーを使い分けている。それを基本とした上でさらに日本人は、positive politenessのストラテジーを加えた敬語行動をとっている。
4. 日本語学習者は、ウチ・ソトの概念による言語表現の使い分けを意識していない。
5. 日本語学習者にとって、negative politeness だけの場合よりもnegative politeness にpositive politeness を加えたものの方が習得は難しい。

参考文献

- 時枝誠記(1951)「対人関係を構成する助詞・助動詞」『国語国文』209.
- 芳賀緩(1953)「陳述とは何もの?」『国語国文』, 23・4.
- 佐治圭三(1956)「終助詞の機能」『国語国文』, 26・7.
- 上野田鶴子(1972)「終助詞とその周辺」『日本語教育』, 17.
- 鈴木英夫(1976)「現代日本語における終助詞のはたらきとその相互承接について」『国語と国文学』11月号, pp. 58-70.
- Brown, P. and Levinson, S. C. (1987), *Politeness*, Cambridge University Press.
- 水谷信子(1985)『日英比較 話しことばの文法』, くろしお出版.
- 水谷信子(1989)『待遇表現指導の方法』『日本語教育』, 69 号, pp. 24-35.
- 井出祥子他(1986)『日本人とアメリカ人の敬語行動』, 南雲堂.
- 井出祥子(1992)「日本人のウチ・ソト認知とわきまの言語使用」『月刊言語』, Vol. 21・NO. 12, pp. 42-53.
- 田窪行則(1989)「名詞句のモダリティ」『日本語のモダリティ』, くろしお出版 pp. 211-233.
- 森山卓郎(1989)「内容判断の一貫性の原則」『日本語のモダリティ』くろしお出版, pp. 75-94.
- 益岡隆志(1991)『モダリティの文法』, くろしお出版
- 小篠敏明編(1983)『英語の誤答分析』, 大修館書店
- 国立国語研究所(1990)『敬語教育の基本問題(上)』
- 国立国語研究所(1991)『副詞と意味の用法』
- 西原鈴子(1988)「話者の前提-「やり(やぶり)」の略-」『日本語学』, vol. 7, pp. 89-99.
- 神尾昭雄(1990)『情報のなわ張り理論』, 大修館書店.
- 森田良行(1977)『基礎日本語1』, 角川書店.
- 板坂元(1971)『日本人の論理構造』, 講談社現代新書
- 森本哲郎(1988)『日本語表と裏』, 新潮文庫

— 談話分析 —

5月23日6ch, 10:00pm- 『ブロードキャスター』

①<伊丹十三襲撃事件のVTRのあとで>

福：福留、天：天野祐吉、嵐：嵐信彦、残：残間里江子

天：うん、やっぱり今のねこう日本の社会で、この部分はつつくといろいろ怖
いぞってえのがいくつかあるんですよね、でそん中の一つでしょ、やっぱり。

残：そうですねー、もうあの今のシーンも映画みたいでしたけど（福：はー）、
やっぱりあのなんか表現する人っていうのは漫然と表現してもしようがない
わけですから、自分の主張をそこに折り込むわけですよねえ。で今天野さ
んがおっしゃったようにやはりなかなか自分の主張をそのままストレートに
は言い難いようなことが、あの一、一見自由ですけどこの国は、とても言い
難いようなことがいくつかもう隠れたところにあるって感じがして、私たちも
やはり言葉なんかには、すごく注意してますよねえ。

嵐：そうですね、まえ、あの、ルポライターでねえ、やっぱ溝口さんという方
がね、暴力団の問題書いて、刺されたこともありましたがよねえ。ま、暴力団
新法ってのはいろいろあったんだけど、普通新聞で読んでみると分かり
にくいわけ、ですよね。（福：ええ、ええ）あれやっぱり映画とかね映像に
すると、非常にこうわかりやすいわけですね、やっ その力というものをね、
やっ 暴力団はやっ 恐れただろうって感じがしますね。しかし同時にだけど
映画で見ている以上にね、今の会見を見てると、やっぱりもう今宮本さんて
のは一般の市民の顔に戻ってますよね。（福：ええ、女優さんじゃなくてね）
だからつまり一般の市民はやっ ああいう怖さを感じるんだなと、まだ一昼
夜しても興奮していてね、やっているっていうあの怖さっていうのがものす
ごく僕映画以上にやっぱり伝わってきたっていう感じがしますよねえ。だから
暴力団でえのは仁侠の徒なんというけどね、まあ、とんでもない話でね、
その暴力団新法のとき仁侠の徒だとか何とかいろいろ言ってたけどね、やっ
ぱり社会的にはやっぱりね、やっ 許されるべき存在じゃないって感じがしま
したね。

天：でも伊丹さんてあれですねえ、なんて言うかなあ、やっぱり表現者というか
ダンディズムというか、あれね、ああいうところに出てもなおねえ、「貴
花田ぐらいしかしゃべれないよ」なんてのは伊丹さんだなって思った。

福：そしてあの一、うちの前で奥さんにやっぱり一生懸命「大丈夫だ」っていう
ことを言ったってえことですよねえ。

②<大相撲の行方について有楽町マリオンの前でインタビュー>

若女：やっぱり曙に勝ってもらいたいですね。みんなが若花田を応援する分、私
たち二人は曙を応援するんです。

若男：あー、とかしてもらいたいですね、か若花田がやっぱ一番好きですね。

資料 [1]

①人物カテゴリー

- A. あなたの学校の校長先生、または大学の学長
 B. あなたの学校の担任の先生、または指導教授 気楽な ←→ 改まった
 C. 弟/妹 [家で話をしている時] 1 2 3 4 5
 D. 兄/姉 [家で話をしている時] ————
 E. 父親/母親 [家で話をしている時]
 F. 普通の友達 [教室で話をしている時]
 G. 特に仲のよい友達 [あなたの部屋で話をしている時]
 H. アルバイト先の上司

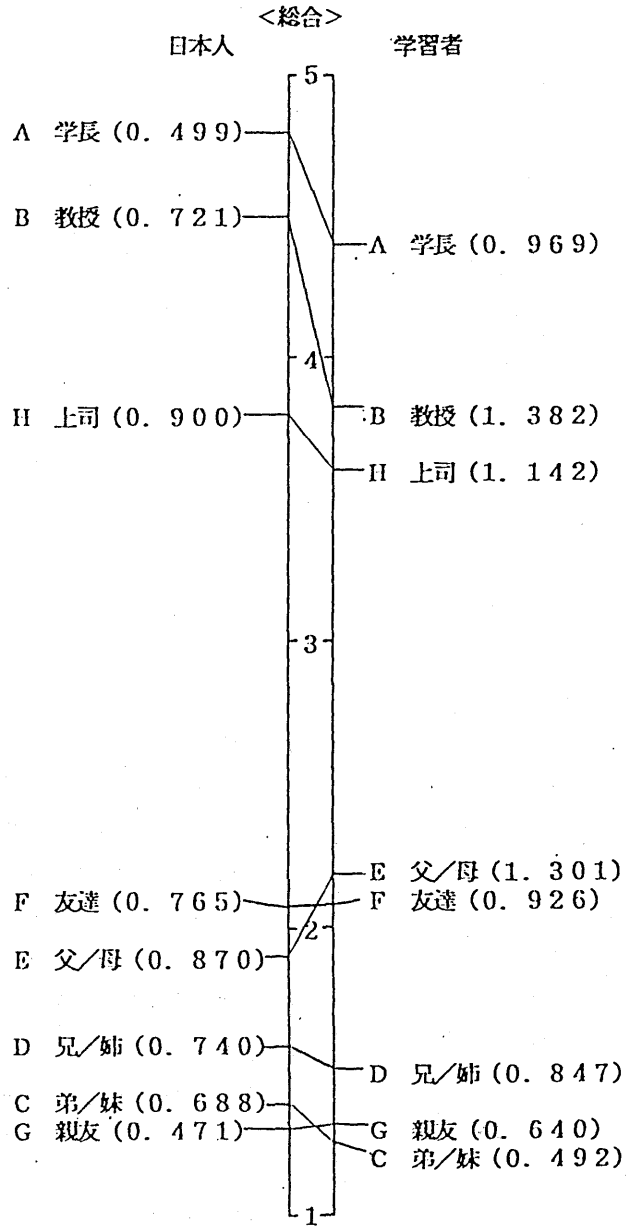
②「やっぱり」を含む表現

- a. やっぱり秋がいいですね。
 b. やっぱり秋がいいですよ。
 c. やっぱり秋がいいでしょうね。
 d. やっぱり秋がいいでしょう。
 e. やっぱり秋がいいです。
 f. やっぱり秋がいいね。
 g. やっぱり秋がいいだろうね。
 h. やっぱり秋がいいだろう。
 i. やっぱり秋がいいよ。
 j. 秋がいいですね。
 k. 秋がいいですよ。
 l. 秋がいいでしょうね。
 m. 秋がいいでしょう。
 n. 秋がいいです。
 o. 秋がいいね。
 p. 秋がいいよ。
 q. 秋がいいだろうね。
 r. 秋がいいだろう。

③「ペンを借りる」依頼表現

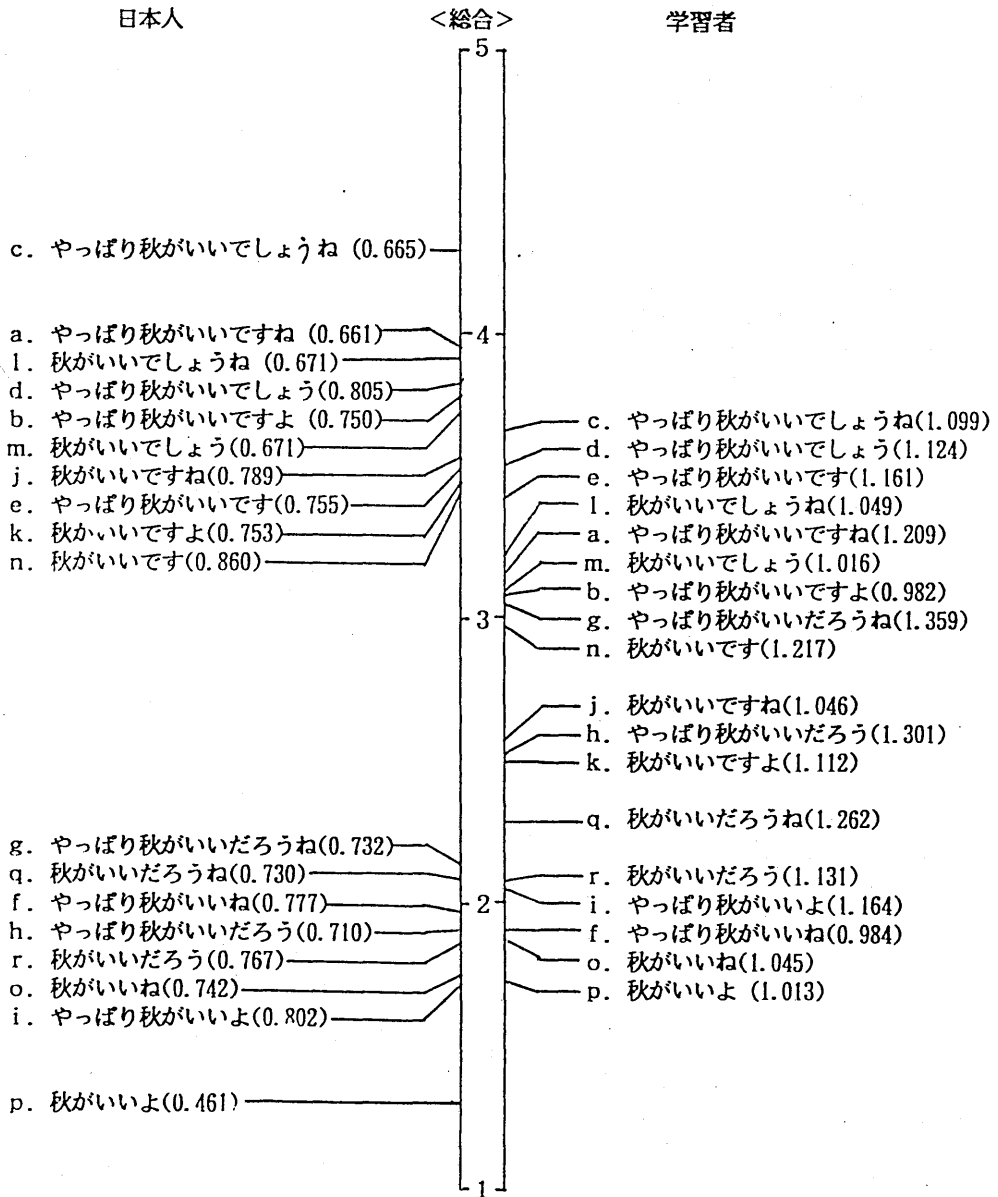
- a. そのペン貸して。
 b. そのペン借りるよ。
 c. そのペン貸していただけませんか。
 d. そのペン貸してくれる？
 e. そのペン借りていい？
 f. そのペン貸してもらえませんか。
 g. そのペン貸していただけますか。
 h. そのペンお借りしてもよろしいでしょうか。
 i. そのペンお借りできますか。
 j. そのペン貸してほしいんだけど。
 k. そのペン貸して下さい。
 l. そのペン貸してよ。
 m. そのペン貸していただきたいんですけど。
 n. そのペン貸して下さいませんか。
 o. ペンある？
 p. そのペン貸してくれませんか。

〔2〕 相手の人物カテゴリーの丁寧度の平均値と標準偏差



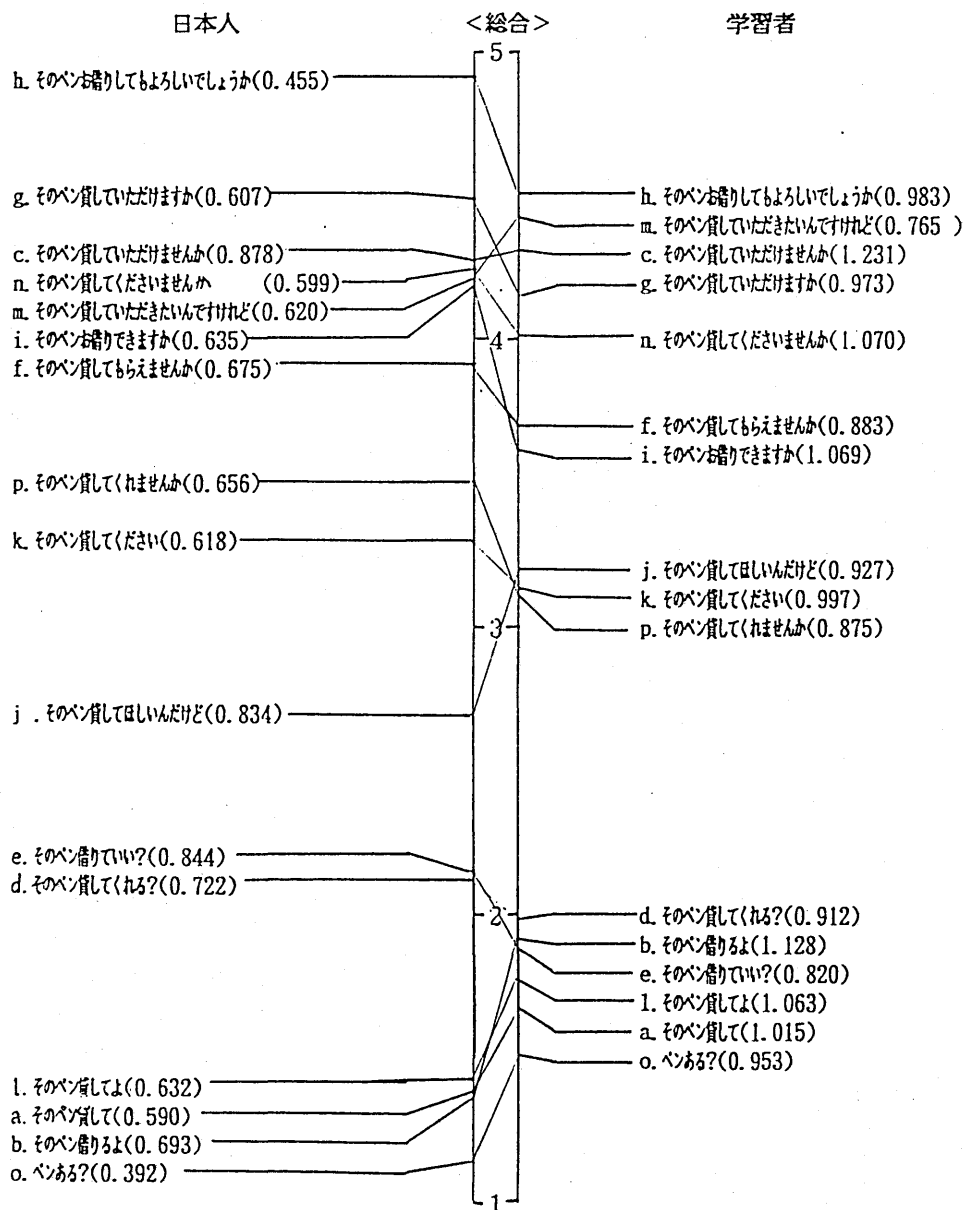
※ ()内は標準偏差

(3) 表現の丁寧度の平均値と標準偏差



※ () 内は標準偏差

〔4〕 表現の丁寧度の平均値と標準偏差



※ () 内は標準偏差

(5) ペンを借りる表現
 <日本人大学生>

【丁寧度】高い ←

→ 低い

丁寧度 高い ↑		A 学長	B 教授	H 先の上司 アルバイト	F 友達	E 父母	D 兄弟	C 弟妹	G 親友
h	7 4	3 9	6						
g	1 9	3 5	2 8					1	
c	2 8	3 1	1 2						
n	5	9	1 0	1					
m	9	6	8						
i	4	1 4	1 8					1	
f	3	1 5	2 6		1				
p		1	9	1	2				
k	1	3	2 1	1	5				1
j	1		2	1	3	1			
e			1	4 1	3 7	2 0	7	2 1	
d				5 2	1 1	1 0	3	2 1	
l				5	9	4	9	1 2	
a				4 1	5 6	5 1	6 6	5 8	
b				6	2 5	2 1	3 1	1 8	
o				5	8	6	1 1	2 5	

↓ 低い

(6)

<学習者>

【丁寧度】高い ←

→ 低い

丁寧度 高い ↑		A 学長	B 教授	H 先の上司 アルバイト	F 友達	E 父母	D 兄弟	G 親友	C 弟妹
h	2 6	1 3	8	1	1				
m	1 6	1 4	6	2					
c	4 2	3 3	1 4	6	2				1
g	1 2	2 0	8	4	1		1	2	
n	9	1 1	8	6	2				
f	3	1 1	1 2	4	4				
i			5	8	4	2	2	1	
j		1	2	4	4		1		
k	1	3	1 0	1 7	1 2	6	4	4	
p			1 0	4	8	2	2		
d				5	2 0	1 0	1 4	8	
b		1	1	1 0	4	1 2	1 1	7	
e		1	3	1 3	1 8	1 6	1 2	1 0	
l	1	1	2	5	6	1 6	7	9	
a			4	6	1 5	2 2	1 7	3 1	
o				4	6	3 0	3 0	1 9	

↓ 低い

(7) 「やっぱり」を含む表現
 <日本人大学生>

【丁寧度】高い ←

→ 低い

丁寧度		A 学長	B 教授	H 先の上司 アルバイト	F 友達	E 父母	D 兄弟	C 姉妹	G 親友
高い↑	c	46	39	19					1
	a	18	18	21	3	1			
	l	18	18	14	4		1		
	d	5	8	10	1	1			1
	b	6	15	17				1	
	m	13	8	5	6	1	1		
	j	9	16	19	5				
	e	3	5	6	1				1
	k	4	6	16	5	2		1	
	n	16	12	6	4	1			
	g		1	1	1	5	2	1	
	q				2	1	1	1	2
	f		1		13	13	14	8	14
	h			1	2	2		2	2
	r				4	1	2	3	3
	o				19	23	17	15	20
↓低い	i			3	2	36	26	26	39
	p		1	1	13	48	39	53	60

(8)

<学習者>

【丁寧度】高い ←

→ 低い

丁寧度		A 学長	B 教授	H 先の上司 アルバイト	F 友達	E 父母	D 兄弟	G 親友	C 姉妹
高い↑	c	25	19	1	7	3	1		1
	d	14	13		5	1	2		
	e	12	8		7	1			
	l	5	4	1	5	4	2	1	1
	a	14	22		5		2	1	
	m	2	2	1	6	6	1	1	1
	b	2	6		4		1	1	
	g	1	1			1			
	n	6	4	2	5	4	6		2
	j	1	3	4	10	5	4	2	4
	h			2		2	3	2	2
	k	1		4	4	5	3	1	4
	q					2	2	2	
	r			4		4	2	7	4
	i	1	2	8	2	2	4	4	8
	f		1	10	9	13	10	8	10
↓低い	o			14	1	19	18	21	14
	p			26	7	13	13	32	26